



「認知症サポーター」20名誕生

社会福祉学科



社会福祉学科の岩崎房子教授のゼミ4年生と高齢者福祉領域に関心のある学生が、地域包括ケアの取り組みの一環として、「認知症サポーター養成講座」を受講しました。本講座は、鹿児島市健康福祉局長寿あんしん課の協力のもと、本学で7月20日に開催されました。本講座の趣旨は、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする認知症サポーターを養成し、認知症高齢者等にや

さしい地域づくりを目指すことです。講座では、認知症サポーターについてのDVDを視聴した後、キャラバン・メイトと呼ばれる専門講師の方の講義を聴講しました。講義内容は、認知症の理解、認知症の方の気持ち、認知症の人と接する時の心がまえ、予防、家族の気持ちなどでした。受講生は、「認知症の医学的な説明もわかりやすかった」「認知症の方への関わり方が具体的でイメージしやすかった」「この講座は、地域の商店街や企業などでも開催したらよいと思う」などの感想が聞かれました。

受講後は、認知症サポーターの印となる「認知症サポーターカード」が配布され、20名の「認知症サポーター」が誕生しました。今後もゼミで企画し、参加希望者を募り、認知症サポーターを増やしていく予定です。

[文 岩崎ゼミ4年：大窪佳奈子・佐々木晶・有園菜央・藤本司・小城慶也・森星南]

かごしま近代文学館で講座を開催

国際文化学科 村瀬ゼミ



国際文化学科の村瀬士朗教授のゼミでは、6月27日にかごしま近代文学館で、本学と同館の共催講座「文学はパンデミックをいかに描いたのかー感染症の近代と日本文学」を開催しました。

第1部は学生の発表で、100年前のパンデミックであるスペイン風邪を描いた志賀直哉や菊池寛の作品、新型コロナウイルス感染の状況を描いた金原ひとみ「アンソールディスタンス」、コロナ予言の書と言われている小松左京『復活の日』、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』を取り上げて発表を行いました。第2部では国際文化学科の小林潤司教授と村瀬教授が「感染症と文学」というテーマで、ダニエル・デフォーの『ペスト』、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』、ヴァージニア・ウル



フ『ダロウェイ夫人』、夏目漱石の『坊っちゃん』『ころ』などを取り上げて、対談形式の講演を行いました。

タイムリーなテーマであったこともあって来場

者の関心も高く、終了後には熱心な質問もあり、アンケートでも好評でした。南日本新聞にも取材していただいて、学生たちには貴重な体験になりました。



市政出前講座「災害に備えよう」を実施

鹿児島市の市政出前講座「災害に備えよう」が7月9日に、「まちづくり概論」(担当:ジェフリー・アイリッシュ教授)の講義で行われ、約80名の学生が受講しました。

講座では鹿児島市危機管理課の職員が、平成5年の



8.6 豪雨災害や、令和2年の人吉豪雨災害の動画をもとに、災害について正しい知識を身に付けることの大切さを訴えました。学生は実際に鹿児

島の地図情報システム「かごしまiマップ」を、スマートフォンを使って操作し、危険区域や避難方法の確認などを行いました。自宅周辺が警戒レベル4だった学生は、「コロナ禍での分散避難も考慮し、知人宅など、誰がどこに避難するか、家族で事前に決めておく必要性を感じた」と感想を話しました。



英語ディベート大会を開催

国際文化学科 マクマレイゼミ生

本学と西南女学院大学(福岡県)の学生が参加して、Zoomによる英語ディベート大会が6月に開催されました。本大会は、英語学習に対するモチベーションを高めることを目的としており、本学のマクマレイ・デビッド教授が主催し、今回で38回目。

ディベートの前に、西南女学院大学のマルコム・スワンソン教授が「SDGsとは? What are the SDGs?」と「SDGsと私たち! SDGs and Us!」の講義を行いました。

4限目に行われたディベートの予選では「コロナウイルスワクチンは、義務付けられるべきか」「オリンピックは延期されるべきか」のテーマで討論を行いました。田中恩妃さん(国際文化学科2年)は「日本語で主張するのも難しいのに、英語で行うことはもっと難しいと



感じた。もっと努力したい」、假屋園美悠さん(同)は「他大学との交流ができ、良い機会となった。また

機会があれば今回学んだことを生かしたい」と話しました。

予選を通過した本学2チームと西南女学院大学1チームは、「リモート・対面・ハイブリッドの中で、学生の学びに適している授業形態はどれか」をテーマに、5限目に決勝戦を実施。決勝戦は直前に各チームの主張を決め、2分間で準備し、3分間で自分の意見を主張するというもの。

優勝したのは本学チームで、MVPに選ばれた原有輝さん(同)は「Zoomによるディベートは、声が聞こえなかったり映像が途切れたりしたため、次回はぜひ対面でディベートを行いたい」と話し、篠田真輝さん(同学科3年)は「西南女学院大学の学生の発音はきれいだった。私ももっと発音に磨きをかけたい。優勝することが出来てうれしい」と話しました。ディベート終了後には、マクマレイ教授から各チームに賞状が贈られました。



[文 マクマレイゼミ2年: 徳田太輝・原有輝]